
魔法少女リリカルなのはRiot

かいじゅりすいぎょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはR·i·o·t

【Zコード】

Z2568Y

【作者名】

かいじゅりすこぎょ

【あらすじ】

「アイツのことをどうしても護りたいんだ」なんて、願つてしまつたのが悪かつたんだろうか。いや後悔はしてないけどな。願つたのは力、与えられたのは魔法。毎日をなんとなく、楽しく過ごせていればそれでよかつた。けれど、小学三年の春、それまでの平穀は打ち破られた。この手にあるのは護るための力。護るために、俺は戦っていくんだ。／魔法少女リリカルなのはの微革変（いや、大革変に近いかもしれません）二次創作です。タグには×××HOLiCとクロスオーバーですが、10%もありませんから、×××

HOLiCを知らないでも問題はありません。なお、縦書きにも対応させました。PCの方で縦書き読みの人が居られたら、ぜひそちらもご覗願に。また、かいじやりすいぎょが学生なので、更新は不定期です。では、魔法少女リリカルなのはRiot、はじめります。

プロローグ代わりの回想（前書き）

すみません。いろいろあつて書き直しました。これからはこっちを
更新します。
三日坊主にならないよう心気をつけますが……

プロローグ代わりの回想

はやてつ！？　はやて！！

なんだつ！？　ざつじて！！

くせう！　俺はつ！　ざつじて！んなつ！！

俺は……こんなにも……無力だ……。

護りたいんだつ！　コイツをつ！　はやてをつ！

痛みから、悲しみから、全てから護りたいんだつ！！

だからつ！　そのために！　そのための“力”をつ！
“力”が欲しいつ！　“力”が欲しいつ！
“力”が欲しいつ！　“力”が欲しいつ！！

その願い、叶えてやるひじやねえか。

ジジジジジ。ジジジジジ。アラームが喧しく鳴り響く。俺はそれを乱暴に止める。

さきほどまで見ていた夢を思い出し、ため息をついた。
始まり……か。あの時、俺たちは始まつたんだな。

……まったく、随分と昔のことを思い出しきまつたじゃねえか。

『ハッショバッケンプロローグ代わりの回想』終了。

そして、物語は十年前へと遡る……

1話 小学校へりこつて男子よつ女子のまつが強いよね。（前書き）

初投稿です。

生暖かい田で見てやつてください。

三人称難しい……。

♪ 変更♪携帯の方には関係ありませんが、PCの方には縦書きで読むことをおすすめします。紹介文では、対応させたなんて書いてますが、実際は縦書き専用みたくなっています。携帯のほうはうまい具合に改行できてるはずですが、どうでしょつか？ 読みにくかつたら、ご一報下さー。PCの方は縦書きには右上に変更できるところが……

え？ そんなの知ってる？ や、やだなー、僕も最初から知ってましたよ？ つい最近、気付いたなんて事はないですよ？ もちろん。

1話 小学校へりこつて男子よつ女子のまつが強いくね。

「おい、それはマジで言ひてんのか?」

「あたりまえや。こんな体でどうやって学校通うんや?」
車椅子の少女は両手を広げ、自分の身体状態を強調する。

「だからってなあ」

「大丈夫や、今まで通り買い物はしてもらつから、愛しの幼なじみには毎日会えるよ?」

「誰が『愛しの幼なじみ』だよ。ここの狸!」

「あー! また狸つてゆうたー」

少年は八神家の玄関で靴を履きながら、そんな捨て台詞を吐きつつ、だいたい俺は年上好みだと何度も言つたらわかるんだよ、と内側で毒づく。

少年が戸を開け、玄関を出ると、春休み明けで怠惰な日々を過ごしていた少年を朝日が刺し貫ぐ。ああ、さわやかな朝だ。さわやかすぎて死にそうだ。なんて、ビートの中学生のようなことを思いながら、足早に去つていこうとするとき、車椅子の少女、八神はやてが後ろから声をかけられた。

「じゃ、行つてらっしゃい、悠斗」

さきほど少年は、年上好み、と自分を称した。けれど、やつぱり同世代の可愛い幼なじみが笑顔でブンブン手を振つている姿は、こう、胸に来るものがあるわけで。

「う、おう、行つてきます。休学だからつて本ばつか読んでんじやねえぞ、はやて」

「うあああー? 照れてんじやねえよ、俺! アイノコウト

そんなことで頭を抱えながら、その少年、相野悠斗の新学期、小学3年の春は始まつた。

「はい、皆さん。それでは、今年一年お願ひしますね」

『お願ひしまーす』

幼げな、けれど去年よりは落ち着いてきたであろう声が教室内に響く。

私立聖祥大学付属小学校。それなりに設備の整つた大学までエスカレーター式の学校である。もちろん、学費は高く、生徒にもそれなりの学力が要求される。が、悠斗たちはまだ小学生である。まだ、そこまでは厳しくはない。新しい学年、新しいクラスとなり、周りの級友たちも入れ替わる。この時期恒例の自己紹介も滞りなく終わった。

ちなみに、悠斗は今年からの編入生である。以前は公立の小学校にはやてと通っていたが、はやての身体上の事情より融通の利く私立へ彼女が移り、一人では行きたがらない彼女のために一緒に小学校を移つたのだ。

まあ、そのはやはては編入してすぐ休学サボッてしまつたが。

「相野君、ちょっと」

そして、現在は放課後である。悠斗はがやがやと賑わう教室から退避しようかと思っていると名を呼ばれた。教壇へと級友をかわしながら向かつていき、彼女へまず一言。

「なんでしょうか、愛川先生。愛の告白ですか？」

「そ、そんなこと聞いてくる生徒は初めてだわ……」

愛川瞳、3・1のクラス担任である。彼女は悠斗の言葉に動搖している、といふか動搖しないほつがおかしい。

「とりあえず、告白ではないわ。残念だけど

「そうですか……」

「こちらこちら。帰ろうとしないの。話はあるんだから

「僕たちの未来予想図についてですか？」

「……。そうね、取りあえず、この書類の事なんだけど……」

悠斗の歳にそぐわない発言はスルーの方向で行くらしい。新任の愛川先生にとつてこれは貴重な経験になるに違いない。この先、こんな生徒に出逢うことは無いに違いないのだろうけれど。

渾身の一言をかわされた悠斗は不承不承、言われた通り、転入関連の書類を見る。

「相野君、あなた、ご両親は？ それと、保護者の住所とあなたの住所が違うのだけれど」

「えつと、両親は、仕事で世界中飛び回ります。ですから、保護者は一応祖父なんですけど、なにしろ老体ですから。今は母さんの友達に面倒みもらっています」

そういうえば、しばらく親父たちと会つてないな、今いじのはビニの国にいるんだろうな、などと破天荒な両親のことを思い浮かべた。悠斗はこういったことには慣れているのか、驚いていた担任に、はははと愛想笑いをする。

「……そう、わかつたわ。ありがとうございます」

「はい。では、今度の土曜日にお食事にでも」

「どんな小学生だ」

「あて」

こん、と愛川先生のチョップが悠斗の脳天に直撃する。とはい、優しい人らしい、全然痛くなさそうだ。

「道を踏み外さないようにね、相野君」

「小学三年生に言うことじやないと思っています」

「君が言つたな」

苦笑いしながら、愛川先生は教室を出ていつてしまつた。

担任との話を終え、さて、そろそろ帰ろうかな、とランドセルに荷物をまとめたところで、しまつた、と悠斗は自分を軽く責める。小学生にとって転校生とか編入生とかは関係ない。とりあえず、興味のあることに飛びつくだけだ。……つまり、簡単に言つと、クラスマイトに包囲されてしまつたのである。

「どこから来たの！？」

「誰！？」

「サッカー部に入らねえか？」

「いや、ここは野球部だろ」

「いやいや、魔法少女研究会だろ」

「一番目の奴はなんなんだ！？俺の自己紹介聞いてなかつたの！？興味なかつたの！？そして、最後の奴は自重しろっ！」

「アツハハハ、おもしろいなあ編入生は」

「お前には負ける。まさか小3でアフロの男子を見るとは思わなかつた！」

3・1は愉快なクラスらしい。つっこみを入れながら、そう思わずにはいられない悠斗である。

それからしばらくは質問時間が続いたが、級友の勢いは止まることが知らず、金髪の子が見かねたのか、わいわいと群れてくる彼らを制してくれたお陰で、悠斗は解放された。ちなみに、級友たちはしたり顔でそれぞれ帰路についていた。どんでもないクラスである。

「悪い、助かった」

「いいのいいの！ 困ったときはお互い様ってね」

会話が小学生らしくないな、と悠斗が言つと、それもお互い様ね、と彼女がクスクスと笑つた。

で、偶然、その金髪の子とその友達と帰り道が同じだつたらしく、四人で帰ることになつた。

縁は奇なものだ。

「あ、自己紹介がまだだつたわね。じゃ、私からね。私はアリサ。アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「わかつた。バニングス」

「いや、だから、アリサでいいつて」

「オーケー、バニングス」

「……」

アリサから無言の圧力が飛んできたので、悠斗はふざけることを

やめた。なんでも、家が金持ちなせいで（アリサは恥ずかしげも無くそう言いきつた）セカンドネームで呼ばれるといろいろと不都合らしい。金持ちの子は大変だ、と感慨深く心づけでつぶやく。

「それで、こいつのヘアバンドの子がすずか

「月村すずかです。よろしくね、えっと、相野君、でいいのかな」

「ああ、よろしくな月村」

おとなしい感じのする子だ、と悠斗は思った。しかし、アリサが言つには、怒るとものすごく怖いらしく（ついでにお金持ちらしい、上流階級間での付き合いでもあるのか？）。まったく想像がつかない……わけではない。はやても普段はあんな感じで明るいのだが、キレた時は半端じゃない。怖い、チョー怖い。ジリジリと追い詰められていつて、気付いたら逃げ場がなくなっている、みたいな感じである。悠斗は思い出して身震いをした。

「で、最後が」

「高町だろ？ タスガニ隣の席の子は覚えてるつ？」

「いやほほ、よろしくね」

「おう」

高町なのは、快活そつ、が第一印象だった。高町についてもアリサの注釈が付いた。ものすごく“頑固”らしい。心に決めたことは一直線。まったく、男より男らしい。それと、唯一、金銭感覚は俺と同じ。少し安心した。なんかむなしいが。

一通り、紹介が済んだ後はお互いにいろいろ日常会話をしていた。しかし、まあ、女子が三人も揃えば、男子たる悠斗の出番はない訳で。

「でね、そこのケーキがね」

「へえ

「何言つてんの。翠屋のケーキも

「ほお

「そうだね、なのはちゃんのところのケーキも美味しいよね」

「はあ

悠斗、空氣と化す。

三人にばれないように、
悠斗はため息をついた。

1話 小学校へりこつて男子よつ女子の戻しが強いよね。（後書き）

はやてにスポーツを並んでみました。細かい動機はありますので語つていくことにします。

さて、物語が全く動きませんでしたね。
次回で動きまくるはずです。
最後に読み感謝です。

2話 「帰つてきたら、鬼がいた。チヨー怖い」 b ヴ悠斗（前書き）

まあ、色々と語りたいですが、とりあえず後書きで。

2話 「帰ってきたら、鬼がいた。チョー怖い」 b ソ悠斗

「ただいまー」

アリサたちと別れた後、少し歩いて俺の家までやっとたどり着いた。ちなみに、あの後はなかなかに地獄だった。まああれだ、ものすごく居心地が悪かつた。初対面というのもあるが、男女比1対3では勝てるわけがない。

「お帰りなさい、悠斗くん」

「ただいま、静さん」

タチバナシズカ
橋静さん。二十代前半の女性で、俺の本質保護者だ。……いや、なんか冷たい言い方をしているが、俺としては、ものすごく頼りにしている大人な女性である。ちなみに交際は小2の時に申し込んだが、

うふふ、あと十年経つたらね。

と、簡単にごまかされてしまった。というわけで、今俺はその約束の十年後を待つばかりである。

ちなみに彼女は小説家である。

原稿でも書いていたのか、ダイニングテーブルで、静さんはノートパソコンのキーボードを叩いている。と、不意に顔をこちらに向けると、にこやかな、ものすごく楽しそうな笑顔でこう伝えてきた。

「今日はどうしてアクエリ亞スを連れて行かなかつたの？ 拠ねてたよー」

.....
あつ！

「ああっー、忘れてた！」

「あああ、やばい。説教来るか？」

「怒つてたよー、『ゴウトはこつもこつもー』って」

「楽しそうですね……」

「たのしーよ、人事だもん。まあ、ネタは勝手に悠斗くんたちから搾り取つてるから感謝してるけど」

「ふふ、と笑つ静さん。くそ、可愛いから何も言ひ返せないっ！」

静さんの言う「ネタ」とは、つまり、小説のアイデアだ。静さんは基本、ミステリーとか文学系の小説を書くのだけど、たまにSFも書いたりするので、そういうときには俺たちは格好の「ネタ」になるらしい。

「あー、こー雑ねねー」

「じゃあ今度テートに」

「ちゅう心地がった!、食料品買ひ込みたがったんだ!。あるし

二
七

ハハ利用されてるや俺 這樣的 小学二年生は荷物持たせ
せる気なのか、この子悪魔さんば。

出来れば、部屋に戻りたくない（

の静さんによる刑の強制執行により、部屋に戻ることになった。

頑張ってねー、との静さんの楽しそうな声を聞きながら、階段にあら用室へ、逃げ出しつゝ一息持つ。萬義はなぜかう。

まあ、いわゆる同居人ではあるのだが、ちょっと普通ではないわ
けで。

もちろんペジトとかでもなく、むしろ最近は相棒兼教育者の様相をみせている感じで、口づめるそこ。そのくせ、すぐ拗ねる。面倒くさいやつである。

そういう感じで、ドアの前までたどり着いてしまった。ス
ーハー、と大きく深呼吸をし、よし、とつぶやいてからドアノブを
回して、部屋へ入った。

「う、そんなに怒るなよ。ちょっと忘れただって」

『A little? It is a person foo
lish as ever.』

「え、なんて？ 英語わかんないんだけど」

『ちつ、This is why "YUTORI" is n
ouse.』

「今、日本語混ざったよね？ ていうかものすごく嫌味なこと言
われた気が」

『おかえりなさい、マスター。学校はどうでしたか？ ちょっと
？ 相変わらず、間抜けな方ですね。ちつ、これから「YUTO
RI」は使えないんです、と言いました』

「よし、ちょっと話し合おうか」

帰ってきた途端にものすごい罵声を浴びせられた。軽く挫けそう
になつた。

部屋は静さんが買つてきたシンプルなカーテンや使い勝手のいい
学習机がある。後は、俺の趣味のクラシックのCDとかで溢れてい
る。ゲームハードも欲しいっちゃ欲しいのだけど、いかんせん値段
が高い。俺の収入ではまったく足りなかつたりする。

『ちよつと、聞いてるんですか、ユウト』

「ああ、聞いてるつて」

そして、この声の発生源は机の上にある、一つの徽章^{バッジ}。もらい物
なので、元の持ち主から言わせれば、『今はエングブレム』らしい。
意味不明な言葉はいまだに理解できそうに無い。

ところで、バッジがしゃべるわけがないのは自然の摂理である。
というか無機物がしゃべるなんてありえないことだ。しかし、俺の
アクエリ亞スはちょっと例外なわけで。

『魔導師がデバイスを持つていかないでどうするんですか！』

「うう、すまん」

と、いうわけである。

俺はただの小学三年生、且つ、時空管理局に勤める次元駐在人、魔導師だつたりするのだ。

ちなみに、少し早めの厨二病なんかではない。決してない。さて、ここで少し俺と静さん、管理局の間柄について色々と注釈をはさめていこうかと思つ。

俺はもともと、第97管理外世界、現地呼称「地球」の生まれではあるのだけど、生まれつきちょっと特殊な力があった。が、それが俺と管理局を結びつけたわけではない。

きつかけは三年前だが、面倒なので省略。そのときに出会つた人物からアクエリアスを渡され、そこが俺の魔導師としてのスタートになつた。

ちなみにアクエリアスはどんな形かというと、蹄鉄に近いと言つたらわかるだろうか。もつと末広がりで、角張つていて、リ字型の蹄鉄の内側、つまり何も無いはずのところに、蒼い宝石がはめ込まれていて、というより、その宝石の形に合わせて蹄鉄型の縁が作られてているような感じだ。そして、その宝石の中央に十字架っぽいよくわからない紋様がある。

さて、話を戻そう。

そんなこんなでマジカルパワーを手に入れ、アクエリアスに鍛えられる日々だったが、ある日、アクエリアスと魔法の練習中の俺の部屋に静さんが突然登場（ちなみにこの頃から親父たちは世界を駆けずり回つていた）。で、小説家特有的好奇心から質問攻めに遭い、結局、事実を吐露した。

とりあえず、黙つてもらつておくことにはしたが、時々、魔法について質問されることがある。それがSF小説のネタになつているらしい。

その後、ちょっとした事件で管理局の存在を知り、そして管理局に俺の存在を知られ、この世界を義務教育やらなんやらでこの世界

を離れられない俺を本局運用部のレティ・ロウラン提督が『次元駐在人』という特別枠に入れ、入局させた。それからちょくちょくと、バイトがあつて、俺は八歳にして初給料をもらつことになった。

静さんは、

どうするかは、悠斗くんが決めるといいよ。

とのことだつたので、居候として少しばかり橘家の収入を援助することになつた次第だ。

ちなみに、静さんと母さんは歳は十歳ほど離れている。母さんが学生時代に近所だつたことで知り合い、妹のように可愛がつていたらしい。

とまあ、昔のこととか現状とかを再認識するという現実離脱エスケープをしていると、アクエリアスの説教が終わつた。そして、言葉の調子を変えて話し出した。

『本局からは連絡がありませんが、今日の十時じろ、この世界にいくつかの魔力反応が見つかりました』

「お、バイトか？」

このあたりでは珍しい魔法関連の事件。その処理が俺の仕事だ。珍しいが故に、俺の収入はあまり多くない。首をつつこめる分はつっこんどかないと損だ。危なくない程度に、だが。

『まだ局からは連絡がありませんが一応見に行つておきますか？』

「そうだな、どうせ暇だし」

『わかりました。では海鳴臨海公園に行きましょう』

俺は制服を脱ぎ捨て、私服に着替え、海鳴臨海公園へと向かつた。

2話 「帰つてきたら、鬼がいた。チヨー怖い」 b ソ悠斗（後書き）

はい、すみません。情報の奔流回でした。

平たく言えば、最初から、主人公＝魔導師という設定です。レティさん、二期のあの人です。勘の鋭い方ならなぜリンディでなく、彼女の部下にしたのかわかるはずです。

さて、説明の補足ですが、悠斗は次元駐在人です。その仕事は、管理外世界において「ぐたまに発生する魔法関連の事故事件を気付かれないように処理することです。オリジナル設定ですから、ちょっと無理がある気がしますが。

気付かれないように、と言つ部分、要チェックです。まる。

むう、何を話してもネタばれになる。むづかしいですね。

あ、ちなみに、Mr・G事件としますが、実質はジュエルシード関連の事件、つまり無印の話です。

さて、わかりやすい伏線ばかり張った気がしますが、今日はここまで。読み感謝、かいじやりすいぎよでした。

3話 それは不思議な出来事なの? (前書き)

説明回です。

3話 それは不思議な出会いなの?

「……おはよー、すずかちゃん、アリサちゃん」

「お、おはよー、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

なのはです。新学期も始まって一週間が経つて、新しいクラスになつたけど、私達仲良しの三人は相変わらずです。

「おい、高町」

「アリサちゃん、宿題ちょっと見せて」

「算数の第五問でしょ？ 私でさえちょっと悩んだわー」

アリサちゃんは普段から「小学校のテストなんて満点で当たり前よ」なんて言つほど成績優秀で。算数だけはアリサちゃんと渡り合える唯一の教科だつたりする。普段は仲良しの友達だけど、算数のテストでは友達と書いてライバルと言つ関係。ちなみにすずかちゃんはどういふと

「いいよね、二人は算数が出来て、私なんか」

『いやいやいや、他全部出来る子に言われたくないよ（わ）！』

「ほえ？」

すずかちゃんは算数はちょっと苦手だけど、他全部（体育を含めて）出来る万能人だつたりして、私的にはそのすゞぐらやましこ子なんです。

「おーい、アリサー？」

私たちは今バスに乗つて小学校へ向かっています。窓の外には海鳴の海がマリンブルーに輝いていて、ついこの間まで寒かったことが嘘みたい。

「（でさ、なのは。この子、どうじゅうやつたのよ？）」

「（うーん、私も知らないよ。さつき見たときものすゞく驚いちやつたんだけど）」

「（とりあえず見なかつた方向で行きましょう）」

「いや、聞こえるんだが！ なあ、この状況にツツツミを入れようぜ？ おかしいだろ？ なあ、おかしいよな？」

さつきから聞こえてきていた男の子の声こよりやく私とアリサちゃんが反応して、その発生源に目を向ける。

「え？ 何がおかしいの？ 悠斗くん？」

『いやいや、すずか（月村）ちゃんのことだよ。』

「ええ！？」

「いや、そんなマス○さんみたいな驚き方はいいから」

相野くんにぴったりくつづいて腕まで組んでるすずかちゃんが自分はなにもわからない、という表情をしている。といづか、さりげなく下の名前呼んでるよ、この子。

相野くんは相野くんで、ものすごく困った、カビロレはしじょうがないみたいな表情。何かあったのかな。

「どうしたのよ、悠斗。ものすごく困った、カビロレはしじょうがない、みたいな表情して」

『読心術！？』

な、なんか思つてたことそのものずばりと言に当たられたよ！？

というか、相野くんがわかりやすすぎるのかも。

結局、なんでそうなったのかはわからずじまいでの、学校についてしまい、悠斗くんは友達の輪に入つて……行こうとして、すずかちやんにクラスでもつかまつてました。

なんて、普通の小学三年生の私、高町なのはですが、最近ちょっと事情が変わつてて。

「『なのは！ なのは！ 助けて、なのは！ 美由紀さんが！ 美由紀さんつてうわああ……』」

「『ユーノくん！？』」

『『哀れです、駄フュレット』』

「『ちよつと、レイジングハート…？ そんなこと言つちやダメ

！』』

えっと、魔法少女、やつてます。

「じゃ、この問題わかる人〜」

三時間田、国語の授業。

「はいっ」

「……はい、相野くん」

「なんで嫌そうな顔するんですか！」

「いつも君がそつやつて愛を囁いてくるからでしょ」

「当たり前です！ 瞳さんに愛を囁かずして誰に囁くんですか？」

「瞳先生ね。……わざわざからあなたにくつづいてる円村さんに囁けばいいじゃない」

「えっとですね、そこは、清少納言です」

「問題は『儂い』の読み方よ。平安のエッセイストの話はしてないわ

あはははは、とクラスで笑いが起こった。瞳先生と相野くんのコメントは（瞳先生は否定するけど）だんだん定番になってきている。最初の頃は瞳先生も驚いていたんだけど、最近はかわし方を覚えてきたみたい。

すずかちゃんは相変わらずくついたまま。クラスメイトも放置することに決めたらしい。私もそのうちの一人。

それ以外にも考えなきゃいけないことがあった、といつのもある。

「『だ、だから、ジュエルシー探しへ僕だけで、つてぎやー』

「『お姉ちゃん。ユーノくんを可愛がりすぎなの』

『駄フニ』

『めつー』

「《ふう、どうにか逃げ切った。……わざも言こかけたけど、

ジユエルシード探しは

「《ダメ、ユーノくん、まだ怪我治つてないんでしょ?》」

「《う、ま、まあ、そつだけど、やっぱりジユエルシード探しは

危ないし》」

「《危ないのは私もユーノくんも一緒にだよ。だから手伝わせて、私の力がユーノくんの助けになるなら力になりたいの》」

「《なのは……》」

『《そうですよ、駄……前使用者さん。マスターの資質には田を見張るものがあります。失礼ですが、あなたの何倍もの才能をマスターは秘めています》』

「《失礼ですが、つて今さらだな》」

「《私には才能なんて……》」

ジユエルシード。魔力を秘めた青い宝石。触つたものの願いを叶える石だけど、同時にとても危ないものでもあって。そんなものが私のうちの『近所に二十一個もばら撒かれてしまっているらしい。もともとそれを見つけたのはユーノくんで、それを安全なところでまで運ぼうとして、途中でじげんせんつていうのが事故にあつてしまつたのが原因。

それを、発見者として確保しようとしたユーノくんもジユエルシードを封印しようとして大怪我。それを私とアリサちゃん、すずかちゃんと相野くんが帰り道の途中で見つけて、動物病院まで連れて行つたんだけど、その夜、不思議な声（今思えばユーノくんの声だった）に導かれて、動物病院に行つて、そして私は魔法とであつた。そのとき、なんとか封印したジユエルシード・シリアル？？は今は、魔法使いのデバイス、レイジングハートの中に入つてゐる。

自慢をするわけじゃないけど、もし、あの時私が駆けつけなかつたら、ユーノくんはかなり危なかつた。だからこそ……

「《お願ひユーノくん、私に手伝わせて！》」

「《……うん、わかつた。でも、無理はしないでね、なのは》」

「《うんー》」

「《それに……つてひいいつ》」

あははー、もひゴーノくんことひつじお姉ちゃんは恐怖対象なんだね。

念話を切れてしまつたから、授業へと意識を集中する。

「それに私は彼氏が！」

「嘘ですね。彼氏がいるなら、僕に言い寄られて、時々うれしそうな顔をするわけ無いですし」

「わ、私、嬉しそうになんてしてないもん」

……なんか、瞳先生が追い詰められてた。瞳先生、頬染めながら言つても説得力ないなの。といつか、瞳先生可愛すぎると、うん。

ユーノくんを助けたい一心で決めた「ユーノくんのお手伝い」。

これが、私の、私たちのはじまりでした。

3話 それは不思議な出会いなの? (後書き)

すみません。つぎも状況把握回です。短くなると思いますが。

「ゴーノーくん、ビックリかなあ」
ひいぃつ。

僕は美由紀さんの声を聞いて、なのはの部屋のベッドの下に隠れていた。

美由紀さんはなんと今まで学校が休みらしい。春休みっていうのは長いものなのかも。

「もー、ここでもないのかー、次は母さんの部屋かな」

美由紀さんがぶつぶつとつぶやきながら部屋のドアを閉める。とはいえ、まだ油断できない。美由紀さんは物音一つで僕を見つけ出してしまつ。どんな耳をしてるんだろ？

それはそれとして。

さつき、念話でなのはに言いかけたこと。伝えておべきだらうか、それとも、今は保留に？

実は、なのはが初めてのジュエルシードと対峙したとき、一度だけ、本当に危ないときがあった。そのとき、一瞬だけ敵の動きが鈍つた。その一瞬でなのはは立て直して封印したけど、あれは明らかにおかしい。

ジュエルシードがためらつたり迷つたりするわけがない。それにあれは、仰け反っていた。近くに人影は無かった。遠距離からの何かが、なのはを護つたんだ。

でも、その「護つた」は結果的なものだ。なのはを護つたほうが本来の目的を達成しやすくなる、と考えたのかもしれない。

つまり。

僕たち以外の魔導師がいる。

そいつが僕らの敵なのか、それとも味方なのかはわからない。
管理局だったとしたら、間違いなく僕らを保護し、事情を聞こうとするだろう。本当はジュエルシード回収も任せていのだけど、

「これは僕の失敗だから、僕が始末をつけるべきなんだ。

敵だったとしたら、狙いは間違いなくジュエルシードだろう。あれは本当に危険なものだけど、同時に強い力を持つものだ。きっとどんな願いでも叶えてしまえる。その代償として、この世界はもちろん、周辺の世界を巻き込んで滅ぼしてしまうに違いないけど。

そのどちらでないにしても、助けた後に接触してこないのはおかしい。向こうは間違いなく、ミッド魔道師だ。この世界でなのはのようない存在は貴重だ。だから、なのはと同じように偶然、魔法の力を手にしたこの世界の人だ、というのは考えにくい。だいたいこの世界に魔法文化はない。だから、向こうがただのミッド人だとすると、なのはのこともミッド人だと考えるのが普通で……。

あーもうっ、ややこしい！

僕は普ス普スと煙が出そうになる頭を抱えながらふらふらとベッドの下から歩いて出てきた。

「おー哥ーくん、一本足で歩けるんだね！　しかも、頭まで抱えて！　まるで人間みたいだよ」

「きゅつー？」

冷や汗をかきながら、畳を上に上げると畳を爛々と輝かせた美由紀さんがいた。

「いやー出て行つたふりしてみたんだけど、大正解だつたねー」
「な、なな。

「じゃ、哥ーくん。お姉ちゃんの胸に飛び込んでおいでのー」
「きゅ

飛び込んでおいでのー、とか言いながら美由紀さんが飛び込んで來

た　　！？

とりあえず、なのはも僕も戦つべきはジュエルシードだけじゃないかもしない。

得体の知れない魔道師、しかも、遠距離から攻撃魔法を使える。

警戒しておこて損は無い。

でも、まあ、とつあえず。

「わゆ

」

「あつ、いひつ、逃げるな

」

今は僕が危なこぐ。はー。

4話 魔道師の影（後書き）

それで、まあこりこりと語れないといけません。

まず、「（）」「《》」の違いについて。

「（）」は、生徒会室から一歩も出ない小説の読者ならわかると思いますが、小声での話し合い、アイコンタクトの類です。まあ、使用頻度は低いと思います。

「《》」はお分かりかと思いますが、念話です。

次にキャラクターとデバイスについて。

俺のすずかは、レイジングハートはこんな感じじゃないと思われた方。

この小説のタイトルに「注目下さい」。

「魔法少女リリカルなのはRiot」

ええ、「Riot」です。辞書で引いてみましょう。

めんどくさい？ ええ、僕もそう思います。

Riotは「荒事、暴走」等の意味があります。ええ、暴走です。

御覚悟下さい。既、原作とキャラが多少変わります。変わらないのはバルディッシュとシグナムくらいかもしません。A-sのことはまだおおまかにしか決めてないので、まだわかりませんが。

次に主人公とヒロインについて。

空気とか言わいで下さい。お願ひします。はやはしうがないんです。ここに関わらせちゃダメなんです。でも、ヒロインです。はい。

悠斗はちゃんと考えてありますので大丈夫です。

最後にユーノくんの推理について

いや、使いやすいですね、ユーノくん。一気に攻めていました。
さて、「得体の知れない魔道師」とは誰でしょう？

以上、かいじやりすいぎよでした。読了感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568y/>

魔法少女リリカルなのはRiot

2011年11月27日18時45分発行